


第8回(2019年)三島海雲学術賞の決定


公益財団法人 三島海雲記念財団(理事長 今関博)は、第8回三島海雲学術賞の受賞者3名を決定いたしましたので、お知らせいたします。本賞は、自然科学及び人文科学分野において、傑出した研究業績を有する優れた若手研究者(45歳未満)を顕彰する賞です。

授賞式は7月5日に東京會館(東京都千代田区)で開催し、受賞者には賞状と副賞200万円が贈られます。


【自然科学分野】(食の科学)

	加藤 健太郎氏 (1974年9月 京都府生まれ 44歳)
	帯広畜産大学 原虫病研究センター 地球規模感染症学分野 准教授 (現)東北大学 大学院農学研究科 動物環境システム学分野 教授
	食の安全を脅かす人獣共通感染症の疾病予防に関する研究 人獣共通感染症の原因原虫の感染レセプターの同定を行い、糖鎖レセプターを基にした抗原虫薬を開発した。また、原虫酵素が感染環において重要な役割を果たすことを見出した。特に潜伏感染機構の解明を行い、急性感染期と潜伏感染期をともに抑制する薬剤スクリーニング系を開発し、薬剤の同定に成功した。さらに、原虫感染阻止に働く金属ナノ粒子の抗原虫機構の解明を行った。

【自然科学分野】(食の科学)

	樽野 陽幸氏 (1982年7月 京都府生まれ 36歳)
	京都府立医科大学 大学院医学研究科 細胞生理学 教授
	味覚神経伝達の分子基盤に関する研究 甘味・うま味・苦味の情報を舌にある化学センサー器官「味蕾」から脳へと伝える分子機構およびその機能修飾機構を明らかにするとともに、“イオンチャネルシナプス”という味覚系にのみ見られる特殊な新しい神経伝達様式を確立した。加えて、これまで不可能であった生体内での味蕾細胞の遺伝子操作技術を確立し、食体験の科学的な理解を深め、さらにその操作を可能にする研究業績をあげた。

【人文科学分野】(アジア地域の歴史・人文科学)

	長縄 宣博氏 (1977年2月 徳島県生まれ 42歳)
	北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 中央ユーラシア部門 教授
	イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏 1905-1917 ロシア帝政末期のヴォルガ・ウラル地域におけるムスリム社会の変容、特にロシアの近代化の過程において形成された「ムスリム公共圏」について詳細な検討を行い、この地域におけるムスリム共同体の形成と発展に関して、従来の帝国対ムスリム社会というステレオタイプ的な見方とは異なる新たな視点を提起した。

(年齢は2019年5月15日現在、所属は申請時)

三島海雲について



1878年(明治11年)大阪府いまの箕面市の寺に生まれた三島海雲は西本願寺文学寮そして仏教大学に学び、24歳の時、青雲の志を抱いて中国大陸に渡ります。やがて仕事で訪れた内モンゴルの地で、遊牧民の活力源と言われる酸乳(発酵乳)に出会いました。

1915年(大正4年)帰国後、自らの内モンゴルでの健康体験をもとに、乳酸菌を活用した食品の事業化に取組み、試行錯誤を繰り返したのち1919年(大正8年)7月7日七夕の日に、日本初の乳酸菌飲料「カルピス」の発売に漕ぎつけます。「カル」はカルシウム、「ピス」はおいしさを表すサンスクリット語から自身が命名。水玉のデザインは天の川、天体の縮図を形どったものです。

「カルピス」を日本を代表する飲み物に育て、長く経営の第一線にあった三島海雲でしたが、幾多の試練を乗り越えることができたのは、「私欲を忘れ公益に資する」「国利民福」に代表される独自の世界観と信念だったとも言えます。1962年(昭和37年)84歳のときに、「私が今日あるのは、先輩、友人、知己、さらには国民大衆の方々の惜しみないご声援によるところのものであると思った。したがって私の得られた財物は、ひとり三島海雲の私するものはない。あげて社会にお返しすべきものである。そして、お返しする方法として、財団を設立することが望ましい。」と考え、全私財を投じ三島海雲記念財団を設立いたしました。

<本件に関するお問合せ先>

公益財団法人 三島海雲記念財団

事務局 山田 誠、唐木田 陽一

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 1-6-10 ジラッフアビル

Tel:03(5422)9898

URL:<https://www.mishima-kaiun.or.jp>

1962年設立

公益財団法人 三島海雲記念財団